

西宮市立郷土資料館 兵庫県西宮市川添町15番26号 〒662-0944
電話 0798-33-1298 email nmc00065@nishi.or.jp web www.nishi.or.jp/~kyodo/

西宮市立郷土資料館所蔵教育資料の展示

～第14回特別展「学校探検」(1999年7月24日→8月29日)にむけて～

西川卓志 (当館館長)

1. 「白箱」資料

郷土資料館には、通称「白箱」という資料保管用ケースがある。資料館の前身のひとつである西宮市立教育会館教育資料室(昭和60年まで)が作成した、白ボール紙製の紙箱である。その規格は、縦505mm、横405mm、高さ100mmである。この収納用の箱が製作されるにいたった理由は、いまとなってはよくわからないが、この箱が一枚物資料の収納に抜群の威力を発揮したことは想像にかたくない。当時の教育資料室は、『西宮戦後教育史』を上梓し、大量の資料を抱えていた。当時、精力的に活動された東薫氏(故人)の大いなる網羅主義の成果で、資料室は教育史に関する重要な一枚物であふれていた。資料を収集する施設や個人は、紙製の一枚物の整理には苦心する。それも相互にあまり脈略のない資料の保管は煩雑で難しい。この問題点を打開するために考案されたのが、この「白箱」法ではなかったかと想像する。箱には、寄贈者名や年月日を記した袋に資料が入れられ、蓋小口には中身のタイトルが略記されている。白ボールには腰があって数箱程度なら上に積むことができ、小口のメモはこの時に威力を発揮した。資料数が増加するに従ってゆるやかな分類を設け、箱には色を違えたラベルも添付されている。白箱資料の種類は、たんに教育資料のみに限定されることなく、教材に使われたサンプルや関係機関のリーフレット、記録写真や複写資料の保管場所にもなった。中身を熟知した当時の担当者は、相当のスピードで必要資料を検索し取り出せた。

その後を引き継いだ者には、興味深い資料が眠っているのはよくよく理解できたが、整

然と保管されているものを壊すのではないかという危惧が先にたって、整理することがなかなかできなかった。教科用図書の整理分類と目録の刊行が先んじたのは、この躊躇からである。白箱資料は、従って郷土資料館ではあまり公開展示したことがない。民具や歴史資料が特別展などで活躍してきたのに比べて、しずかに収蔵庫の棚で眠っていた感がある。しかし、他の資料の分類整理が進行するなか、この白箱資料も、いよいよ整理の対象になってきた。

2. 市立郷土資料館の教育関係資料

今回の特別展は、この白箱資料をメインに教育史の物質文化的側面を展示しようとするものである。教育とは精神の問題であるかのように語られるが、その現場ではじつに多くの事物が残る。いまも、学校では多くの資料が生産されている。この教育の物質文化的側面はあまり重要視されることはなく、その研究は二次的三次的な扱いにあまじってきた。しかし、記憶のなかの学校の姿を形作っているものは、まぎれもなくこの事物たちであり、その点では重視され研究されるべき対象と考えられる。郷土資料館では、このような考え方に立って開館以後もこれらの収集に努め、学校で生産された事物の一部が現在郷土資料館に収蔵されている。その主なものには、教科用図書（主に初等教育の教科書）5500点、教育史関係資料1000点、教育関係民具50点、関係参考書9900点がある。今回の特別展示では、これら資料をテーマごとに分類し展示公開することとした。

3. 第14回特別展「学校探検」

「学校を探検する」とは、どういうことか。いまさら、校舎の中を巡ってみても目新しいものはない。小学校や中学校は毎日通った場所だからよく知っていると、市民の方々の声が出る。たしかに、現在通学している、またはかつて通学していた学校については、経験的に見知っている。しかし、それは各自が過ごした数年から10年間の学校のことに過ぎない。近代学校制度は、「学制」がスタートしてからでも120年以上も経過している。学校は100年間不変であったとも思えないし、またでたらめに変転をくり返してきたとも思えない。どのようなところが変わり、何が変わらなかったのだろう。「探検」とは、学校教育の現場に蓄積されてきた多くの事物を吟味しながら、近代の学校を歴史的に考えて見ようとするものである。

展示は、「習って上達」「事務室はいそがしい」「教室のくらし～教科書は重要」「教室のくらし～学校民具」「教室のくらし～生徒の作品」「テストだ、成績だ、卒業だ」「夏休みと宿題」の各コーナーで構成する。これで学校教育のすべてを語ろうというものでは当然

ない。当館で保管している資料を均等に公開しようとする、自然に生まれ出る内容である。各コーナーの概略は以下の通りである。

a. 習って上達

江戸時代の庶民教育を、全体の導入として取り上げる。いろいろな知識を理屈とともに教え込む近代以降の教育方法と異なり、近世期のそれは「よみ、かき、そろばん」の技を習得し上達していく、きわめて自学自習的な要素の強いものであった。これらの現場で使われた「往来物」を見ながら、近代以前の庶民教育を垣間見ることから展示をはじめめる。

b. 事務室はいそがしい

学校は制度の結集体でもある。事務室では、この制度のもと整然と行われる事務仕事が継続している。生徒の学費の納入書や先生の雇用に伴う各種書類が事務室には保管されている。この資料のなかには、学校の制度的な側面を物語る物が多い。

c. 教室のくらし～教科書は重要

生徒にとって学校とは、なんといっても「教室」であろう。いろいろなことを教室で習い、友達と毎日顔をあわしたのも教室である。この生徒たちの教室での日々が生み出す資料も数多い。なかでも、授業と切り離せないのが教科書である。この教科書も教育制度変遷の節目で大きく変化してきた。その変化の過程を教科書そのものでたどってみたい。展示の中心となるのは国定教科書である、国定教科書とはどのような教科書だったのだろうか。

d. 教室のくらし～学校民具

学校には多くの道具があった。教室の黒板や机・椅子にはじまって、オルガンやピアノ、体育道具などがそれである。学校生活の舞台装置を展示する。

e. 教室のくらし～生徒の作品

作品とは、生徒が自ら製作した事物である。図工や習字の時間の成果物に限らず、授業中に一生懸命にとった帳面も対象とする。

f. テストだ、成績だ、卒業だ

生徒にとっては最も頭の痛い内容ではあるが、学校では節目節目の重要な行事である。このなかでも、成績表と卒業証書が多く収集されている。成績表はいっけん同じように見える資料が多いが、よく見ると、その名称に数種類あり、記載内容にもいくつか相違点が見られる。在学中は成績欄にしか目がいけないが、展示物として眺めると、そこには学校に通うことによって生まれた各自の客観的なデータが収載されていることに気付く。また、卒業証書には変遷をくり返す学年制度の痕跡を見ることで興味深い。

4. 展示資料紹介

ここでは、今回展示予定の資料を1点紹介する。

「夏季休暇中ノ心得」 明治42年7月 大阪市第二北野尋常小学校発行

夏季休暇中の心得など、何が珍しい、と言われそうであるが、国定教科書が刊行され始めた明治時代のものとなれば、興味がわく。通称ザラ紙に刷られた一枚物の資料で、そのため傷みもひどい。夏に休暇を設けるという形は、近代教育がスタートした初期からあった。明治時代も終わりに近いこの時期には、「生徒と夏休み」にまつわる学校側の留意点も蓄積されおり、その内容が本資料に集約されているかのようである。

○衛生ニツイテ

- 一、休ミノ中ハ、身軀ヲ大事ニシテ、学校ガ始マツタラ、スグ出ラレルヨーニ心掛ケヨ。
- 二、朝ハ、早く起キ、夜ハ早く寐テ、夜遊ビラスナ。
- 三、寐ル時ハ、シツカリ寐衣ヲ着テ、寐冷ヲセンヨーニシマタ、晝モ裸体ニナツテ腹ヲヒヤスナ。
- 四、病氣ノ外ハ、晝寝ヲスナ。
- 五、男ノ子ハ、頭ノ髪ヲ短ク刈リ、女ノ子ハ時々髪ヲ洗ヒ湯ニハ度々入ツテ身軀ヲヨク洗ツテ清潔ニセヨ。
- 六、跣足デ外ヲアルクナ、運動ヤ、散歩ヤ、又、外ヲアルク時ニハ帽子ヲカブルカ日傘ヲセヨ。
- 七、食事ニハ、時間ヲキメ、マタ、タベル分量モキメテ置キソシテ、コナレノワルイモノヤ、クサリカケタモノヤ、ジユクシナイモノヲ、タバタリ、マタハ、生水、氷水、ラムネナドハ、ナルベク飲マンヨーニシ、マタ、間食モスナ。
- 八、不潔ナ所ヤ流行病ノアル所ニ行クナ。気分ノワルイ時ニハ、ジキニ醫者ニミテモラヘ。
- 九、水泳ヤ、海水浴ニハ、オトナノ人トイッショニ行ケ。

○復習ニツイテ

(中略)

○運動ニツイテ

- 一、休ミ中ハ、学校ノ運動場ハアケテアルカラ、來テ楽シク遊ベ。
- 二、餘リ激シイ運動ヲセンヨーニセヨ。
- 三、時々野原ニ出テ、善イ空気を吸ヒ、気ヲハラセ。
- 四、朝夕ノ涼シイ間ニハ、散歩モセヨ。

○其他ニツイテ

- 一、父母ノ仕事ヲ手傳ヘ、マタ、オ客ノモテナシヤ、親類ヲ尋ネルコトヤ、内ノオ墓ニ參ルコトヤ、喜ミ事ヤ、悲ミ事ノアツタトキニハ、自分ノデキル事ハ自分デシテ、モシ、知ラナイ事ガアツタラ、父母ニ尋ネテ相應ノ事ヲセヨ。

(中略)

- 四、女ノ子ハ、殊ニ毎日ノ拭掃除ヤ、日用道具ノ始末ニ気ヲツケテ、出来ルコトハ自分デコレヲセヨ。
- 五、お金ハ、少シモ無益ニツカワズシテ、成ルベク貯金セヨ。
- 六、慰ミニ讀ムモノハ、ツマラン小説ナドデナク、タメニナルコトヲ書イテアルモノヲ読メ。
- 七、野鄙ナ流行歌ヲ歌ツタリ、カケゴトノヨーナワルイ遊ビヤ、危険ナ遊ビラスナ。
- 八、遊ビニ行ク時ニハ、其行先ト帰ル時間トヲ父母ニ告ゲテ許シ得ヨ、ソシテ、遊ビニイッタラ、帰ル時間ヲ、必ず違ヘルナ。
- 九、寐床ノ出入ナドハ、ナルベク自分デセヨ。
- 十、コノ心得書ハ、毎日一度ハ必ずコレヲ讀ンデ、コノ通りニ行ヘ。

以上

明治四十二年七月

大阪市第二北野尋常小学校

(本文の一部、旧字を新字に改めた)

カタカナ混じりで長々と心得が並んでいる。「復習ニツイテ」の項目は以外に簡単に、学校で習ったおさらいをしっかりとやるように、とされているだけである。なんとと言っても、休暇中を健康に過ごし、自堕落にならないように留意することが力説されている。当時、就学者数が増加していた学校では、伝染病の防疫体制などの衛生面が問題になっており、数々の施策が各方面から出されていた。また、都市部の環境問題が表面化し、好環境を求めて都市からの疎開も始まっていた時期であった。「時々野原ニ出テ、善イ空気を吸ヒ、気ヲハラセ」が掲げられているのは、その反映であろう。今夏も成績表や宿題とともに、「夏休みの過ごし方」が配布された。90年前の休暇心得と比較するとどうでしょうか。一度、展示を見ながら比較してみてください。

歴史ハイキング「吹田の文化財をめぐる」で訪れた名次神社と西宮

京田直美 (当館囑託)

1. はじめに

1999年4月29日、郷土資料館主催行事「歴史ハイキング」で、吹田市内の史跡をめぐった。吹田市北部の山田を出発し、南高浜町にある吹田渡跡まで南下するコースを行く。

出発してすぐ、吹田の古道山田街道に入ると街道沿いに圓照寺、山田伊射奈岐神社がある。圓照寺は、文徳天皇勅願の仁寿三（853）年天台宗三代座主慈覚大師円仁創建という寺伝をもち、持仏である准胝観音菩薩立像は府指定文化財となっている。山田伊射奈岐神社は、『延喜式』神名帳に載る伊射奈岐神社のひとつといわれる。今なお、山田町、千里丘地域の産土神として信奉されていることが、10月10日に行なわれる秋祭りの神事「木あたり」のために設置された木柱のきれいな様相にもみてとれた。続いて佐井寺くりぬき水路を見学する。この水路は、佐井寺と釈迦ヶ池間の丘陵洪積層中の粘土を素掘りした農業用水路、水の確保のためとはいえ過酷な事業の跡である。西宮にも花崗岩盤に横穴を通した市指定上ヶ原水路がある。それから、佐井寺（山田寺）へ参詣する。天武天皇六（677）年道昭草創、一説には行基開山という。地元ではサンデンジの通称で親しまれる。佐井寺と称するようになったのは、眼病にきくという地下水「佐井の清水」が境内にひかれた江戸時代のことである。境内には奥院と称した薬師堂が残り、今も檀那寺として崇敬される。それから、岸部紫金山公園内にある吹田市立博物館の特別展「北摂古寺巡礼——信仰の語り部たちとの出会い——」を見学。次に総檜皮葺七間社流造で桃山風の細工彩色のある国指定重要文化財指定の吉志部神社本殿を拝観した。ここから、亀岡街道をしばらく歩いたところに名次神社があった。

2. 名次神社（吹田市岸部中1丁目所在）

名次神社は住宅地の中に小さな境内を構えている。3段の石段をのぼると石鳥居と石灯籠一対、その正面に本殿がある。これらを含めて、境内にある建造物とそれぞれの事跡は以下のとおりであった（執筆者調査）。

刻銘 石鳥居 「明治七年甲戌十月建之 寺内□屋弥作」

石灯籠 「御神燈 木村金十郎」

石碑表 「名次神社」

裏 「岸本□三郎 岸本藤五郎 岸本廣治 岸本忠蔵」(鳥居向右)

石柱 「天御中主□」「□西十□ 源内勇□ 吉田(?) □四郎」

「明治七年戌十月建之」(本殿向右)

石製狛犬「奉納 明治七年戌年□□十一月」(向右)

「奉納 □□ □□□吉忠郎」(向左)

石製手水鉢「洗心 平成八年五月吉日建之」

墨書 鉄製、朱色の御神燈「奉納 御神燈 名次神社 平成八年五月二十六日」

(本殿両側)

石造仏5体(木札「地藏尊建之奉納」横)

看板 平成8年度の浄財寄進奉納者記載ほか

また、吉志部神社氏子中による世話も窺われる。名次神社が吉志部神社にあった御輿の渡御神事のお旅所として祭場となっていた関係だろうか。

名次神社について、『大阪府全志』⁽¹⁾によれば、「名次神社は字名次宮にあり、天御中主命を祀れり。創建の年月は詳ならず。貞観元年正月二十七日正五位下を授かり給ひし舊社なれども、今は無格社にして、四拾壹坪の境内に本殿のみを存す」と説明がある。西宮の名次神社と共通するのは、「貞観元(859)年正月二十七日正五位下を授かり給ひし舊社」とされることと、祭神为天御中主命であるということである。

さらに、『攝陽群談』⁽²⁾には、「同郡(嶋下郡*)吹田村にあり。土俗二魂坊の亡火を鎮祭り。名就宮と稱すと云へり。『延喜式神名帳』武庫郡名次神を移し祀祭る歟の一説あり」と記されることから、18世紀初頭には吹田の名次神社は、西宮の名次神社から分霊されたのではないかと考えられていたことがわかる。どのような形で吹田の地に祀られるようになったのかわからないが、『攝津名所圖會』⁽³⁾には、「名次神祠 岸部村にあり」とあるので、18世紀末には神祠として祀られていたようである。

3. 名次神社(西宮市名次町5番地所在)

西宮の名次神社は、現在廣田神社の摂社である。『延喜式』式内社に列する武庫郡内四社「広田・名次・伊和志豆・岡太」のひとつであった。この名次神社のもとあった名次山(名次丘)は万葉集にも詠まれた名勝地で、『攝津名所圖會』に「名次山、山脈武庫山より讀く」ところにあった。

『攝津志』⁽⁴⁾の記事によれば、「名次神社 鉄靱 貞観元年正月授ク正五位下ヲ。○廣

田ノ社ノ西名次ノ丘」とあり、鍬鞆の奉幣を受けた神社であることが伝えられている。また、「資忠王西宮社参日記」など室町時代の記録には廣田社参詣前に参ったことも記されている。そして『武庫郡誌』には、「名次神社、當社（廣田神社*）の西方、西宮町字名次の丘に鎮座す。鍬を以て神體となす。神名帳考證に祈雨神と見江たれば、水分神を祭れるものなるべきも、今祭神を詳にせず。貞観元年正月正五位下を授けられ、延喜の制大社に列り、四度官弊及祈雨祭に預れり。」と説明されている。ここでは、祭神について不詳としているが、「西宮参詣独参詣案内」に天御中主神だと記されたことがある。ただ、共通していわれる神格は、水と関係する神ではなかったかということであろう。

次に、名次神社の祭祀について、その移転地と関わる説があるので、それらを紹介してまとめたい。

4. 名次神社の祭祀

名次神社についての論考には、吉井貞俊氏の「名次神社考」、吉井良秀「産所及名次の事」、田岡香逸『西宮地名考』、飯田寿作・浅田柳一『酒都遊観記-酒都歳時記-』などがある。

吉井貞俊氏は、「古代神事目録」（元龜二（1571）年）資料にある「名次御神事西崎丁居籠」という記事に注目し、西崎丁という地は今の建石町また西波止附近にあたと推察の上で「海事に関係ある信仰団体が特に居籠を行って奉仕する日だと想像される」と述べている。さらに、慶応年間（1865-1868*）に西宮神社に寄進のあった名次大明神の石鳥居の願主が「浦中商人戎講中」であることから、海産物を商なう人々によって信仰されたと結ぶ。

また、田岡香逸氏は、名次神社のもとあった場所を越水丘陵の辺とし、この地域が漁撈関係遺物出土の多いことから、漁業とゆかりがある神だと述べている。

吹田の名次神社が神祠として祀られていた江戸時代（18世紀頃）についていえば、西宮では漁民の中から出現したと思われる干鯛を扱う回漕業者の活躍が盛んであった。そして、肥料として、人糞尿、藁灰、油粕などを扱う回漕業者の往来は、島上郡、島下郡など吹田地域にも及んでいた。さらに、吹田浜の附近には肥料を扱う回漕業者が集まっており、吹田渡においても、その利用について争いが起こった史実もある。推測にすぎないが、吹田における名次神社の分霊は、西宮の干鯛を中心とした回漕業者とこれに関わる吹田の人々との交流を背景としたものではなかったと考えられはしないだろうか。

5. おわりに

名次神社から、護国寺、高浜神社まではかなり距離があった。吹田村産土神三社のひとつに列した高浜神社は、江戸時代には吹田神社、名就神社と称されたともいう。この辺りが吹田浜といって風光明媚な名勝地、平安時代末から鎌倉時代にかけて、京都の公家、貴族の遊樂地として賑わったところである。今は、商店街が立ち並び賑わいをみせている。

ここから、東吹田街道をすこし行くと吹田渡跡がある。吹田渡のあった神崎川は、淀川へ、そして西宮の方へも続いていく。

註

- (1) 『大阪府全志』清文堂、大正11年11月刊
- (2) 『攝陽群談』元禄14 (1701) 年成立
- (3) 『攝津名所圖會』寛政8 (1796) ~寛政10 (1798) 年成立
- (4) 『攝津志』1734年~1748年成立

* 執筆者補記

参考文献

- 『吹田市史』第2巻
『西宮市史』第1巻~第3巻
『武庫郡誌』大正10年刊
『兵庫縣神社誌』兵庫縣神職會、昭和12年3月刊
吉井良秀「産所及名次の事」(『老の思い出』所収、大正14年1月刊)
田岡香逸『西宮地名考』民俗文化研究会、昭和45年12月刊
吉井貞俊「名次神社考」(『伏柴遺芳』所収、後伏柴山房、平成元年11月刊)
飯田寿作・浅田柳一『酒都遊観記-酒都歳時記-』酒都遊観記刊行委員会、昭和49年9月刊
付記

歴史ハイキング催行に際して、吹田市立博物館の滝沢幸恵氏、望月直子氏には大変お世話になった。また、心よく拝観に応じて下さった寺社の宮司各位、ここに記して感謝の意をしたい。

目次 CONTENTS

西宮市立郷土資料館所蔵教育資料の展示

~第14回特別展「学校探検」にむけて~ (西川卓志) … 1

歴史ハイキング「吹田の文化財をめぐる」で訪れた名次神社と西宮 (京田直美) … 5

西宮市立郷土資料館ニュース第24号 1999年(平成11年)7月24日発行